

「汝、殺すなかれ」

「殺してはならない。」(出エジプト記 20:13)

「命」の大事さは自然的な要求であり、私たちの倫理的な命題でもあります。そして「生命、人権の尊重」は多くの思想が語っていることであります。しかし、聖書は生命の問題を本質的により深い意味で語っています。

創世記1章27節を見ると、「神は御自身にかたどって人を創造された」と書かれています。

そして、9章6節には「人の血を流す者は、人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ。」と記されています。つまり、人を殺すということは自分を殺すことであり、神様のかたちを破壊することでもあるのです。

人間の命の大事さが人間同士のみの問題だけではなく、神様と関係されているということです。人間の血、命は神様の支配の特別な領域であり、命は創造主なる神様に属するものです。この戒めに使われている「殺す」の原語は個人的な報復の殺害、故意的な殺人を意味していますが、そうであるとして、戦争による殺戮などが許されることではありません。殺すということは命を造ってくださった神様への侵害であり、反逆であるからです。

主イエスは「隣人を自分のように愛しなさい。(マタイ 22:39)」と命じられました。裏を返せば、隣人を侵害することは自分への侵害でもなるのです。そのような意味で、殺してはいけないというのは、自分のためにも積極的に隣人を生かしなさいという戒めであるのです。

しかし、神様の命令に背いたアダムとエバの子孫は兄弟を殺し、復讐のためには人を殺すことにためらいもない者になっていきます。レメクの例がそのようなことを物語っています。

「(創世記 4:23~24) さて、レメクは妻に言った。「アダとツィラよ、わが声を聞け。レメクの妻たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。わたしは傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍。」まさに、墮落した人間の姿であります。

一方では生命の尊さを知っていながら、一方では血を流すことをしているのが私たちの世界であり、それを私たちの歴史が物語っています。

神様への恐れをもって、主によって新しくされなければ、私たちはこの戒めに真に従うことができないことを心に留めておきたいと思います。

*共に祈りましょう。

- ・ 私たちを神様の御自身にかたどって造ってくださったことに感謝しましょう。
- ・ 神様を恐れ、互いの命を尊重できる私たちの世界でありますように祈りましょう。
- ・ 神様によって生かされている隣人を自分のように愛することができるように主の御導きを祈りましょう。